

三重県護国神社奉賛会報

第七十三号



明治天皇御製(明治十一年)

人もわれも

道を守りてかわらざば

この敷島の国はうごかじ

祭彰顕徳遺靈英御

平成二十一年度

三重県護国神社奉賛会総会開催

平成二十一年十月十六日午後二時より総会に先立ち拝殿に於いて『御英霊遺徳顕彰祭』を斎行、乙部奉賛会長を始め役員・会員等が参列のもと、玉串を捧げ御英霊に感謝の誠を捧げた。

その後、南参集室に於いて総会が開催され会長挨拶の後、黒宮理事(神社責任役員)が議長となり議事を進め、前年度の事業報告及び決算本年度事業計画案及び予算案等議案はすべて承認された。

総会終了後、会員の山端利一氏が自身の体験を記した「ラバウル方面の思い出」を朗読した。最後に原宮司が御礼の挨拶を述べ、総会は滞りなく閉会した。



議事を進める黒宮理事

会費納入のお願い

新年度『平成二十一年度』(平成二十一年九月一日～翌年八月三十一日迄)に入りましたので、新年度会費を納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年会会費 正会員 二千元
特別会員 一万円

奉賛会入会のご案内

奉賛会は護国神社の御英霊を恒久的に奉慰奉賛していく事を目的とし結成され、多くの方々よりご賛同を賜って参りましたが、会員数が年々減少しているのが現状です。

そこで、一般有志の方の入会を進め、会員の増加を図りたく、会員よりのご紹介を宜しくお願い申し上げます。

入会ご希望の方は直接神社へお越し頂くか、奉賛会事務局までお知らせ下さい。

三重県護国神社内 奉賛会事務局

☎〇五九一二二六―二五五九

——英霊の言乃葉——

“民族の誇り”を胸に

海軍少佐 西田 高光 命



大分県出身

海軍第十三期飛行予備学生

昭和二十年五月十一日戦死

二十二歳

学^{がくわ}驚は一応インテリです。

さう簡単に勝てるなどとは思つておません。

しかし、負けたとしても、そのあとはどうなるのです……

おわかりでせう。

われわれの生命は講和の条件にも、その後の日本人の運命にもつながつてゐますよ。

さう、民族の誇りに……

【平成四年四月靖國神社社頭揭示】

英霊の言乃葉(8)より転載

※上記の言葉は西田中尉(当時)が出撃二日前、鹿児島鹿屋の野里村の基地に於て、海軍報道班員・山岡莊八氏の質問に答えたものである。



西田高光命に寄せ書きして贈られた絹のマフラー

【解説】

昭和二十年五月十一日、神風特別攻撃隊「第五筑波隊」隊員として「爆装零戦」に搭乗、鹿屋基地を出撃、南西諸島洋上にて戦死。

西田中尉は海軍報道班員山岡莊八の質問にこのように答え、民族の誇りを胸に、五〇〇キロ爆弾と共に大空へ飛び立っていった。

昭和二十年四月二十三日、第五航空艦隊付(鹿屋)となり、十日を経

ずして地上勤務員と特攻隊員の区別を肌でわかるようになった山岡は、どうして後者に自由闊達さと底抜けの明るさがあるのか、その秘密を解く相手に選んだのが西田中尉だった。この戦いに勝ち抜けれると思うか、もし負けても悔いはないのか、今日の心境になるまでどのような心理の波があったのか、など……

西田中尉出撃の二日後、中尉の母と兄嫁が彼をたずねて来た。

真実を話せなかつた山岡は、中尉は前線の島に転勤したと告げ休息所に案内したが、そこには「西田高光中尉の霊」が祀られ線香がそなえてあった。

あわてた山岡の耳元に兄嫁が「母は字が読めません」とささやく。その場を取りつくろつたつもりで二人を控室に伴い、お茶が出された時だった。「ありがとうございます。息子がお役に立ったとわかつて、安心して帰れます」山岡はいきなりこん棒でなぐられた気がした。文字は読めなくとも母親の勸ですべてを悟つた中尉の母は、丁寧に挨拶し、兄嫁を励ましながら涙一滴見せず立ち去つた。

以上が昭和三十七年に発表された山岡莊八の「最後の従軍」の要約である。

西田中尉は、昭和十七年四月四日から十八年九月まで、十九歳の若い教師として郷里の国民学校に奉職、六十八名の教え子に兄さんと慕われた。そして、その師弟間の文通は飛行科予備学生として海軍入隊後も続いた。二十年五月、鹿屋基地に近い野里国民学校の宿舎で最後の返事を書く。

「皆んな元気かね。爛漫の春過ぎ新緑に南風薫る此処南の基地に俺は居る。相変わらず元気だ。(中略)今日出撃の予定だったが、雨なのでこの手紙を書く暇が出来た。そして必ず続いて呉れる皆んなの顔を思い浮かべながらこの便りを書いている。戦争は必ず勝つ。それ迄はまだまだ非常に高い苦難の山がある。必ず日本魂で乗り切るんだ。頑張つて呉れ……」

と、後に続く教え子を激励している。西田家に六男三女あり、三男まで戦死して、「最後の従軍」が発表された頃、西田家にはまだ三つの遺骨箱が並べられていた。中尉の意志を継いで教師となった四男久光氏は、両親を助け葬式を出した。西田家の戦争は終わった。

【いざさらば我は

みくにの山桜より転載】